



今原 伸治 さん [薬学部2期生]
武田薬品工業(株)医薬営業本部
マーケットマネジメント部長



藤川 隆彦 さん [薬学部14期生]
鈴鹿医療科学大学大学院薬学研究科 教授



三浦 宏子 さん [歯学部2期生]
国立保健医療科学院 国際協力研究部長



中村 公則 さん [歯学部13期生]
北海道大学大学院先端生命科学研究院 准教授

創立40周年記念特別企画 誌上座談会

「北海道医療大学と私」

全国各地の医療・福祉現場、研究・教育の最前線で活躍中の本学卒業生に、
現在の仕事をはじめ、大学時代の思い出、母校への期待などをお聞きしました。
それぞれが精力的に活動されているなか札幌にお集まりいただけた4人と、個別インタビューに応じてくださった4人、
合わせて8人の卒業生のお話を誌上座談会としてまとめました。



河村 奈美子 さん [看護学科1期生]
大分大学医学部看護学科 准教授



大原 裕介 さん [医療福祉学科※7期生]
社会福祉法人ゆうゆう 理事長
※現臨床福祉学科



本谷 亮 さん [臨床心理学科1期生]
福島県立医科大学医療人育成・支援センター
／医学部神経精神医学講座 助教



千葉 真澄 さん [臨床心理学科3期生]
テレビ北海道 アナウンサー

卒業生たちのいま

黒澤：様々な分野で活躍中の卒業生のお話をこうしてお伺いできることを大変うれしく思います。みなさんの現在のお姿から本学と実社会のつながりが見えてくることを期待しております。お仕事のご様子、母校の思い出を語って頂き、本学への提案、励ましも頂きたいと思えます。よろしくお願ひします。まず、自己紹介を兼ねて、現在のお仕事についてお話しください。

今原：薬学部2期生です。卒業して武田薬品工業に就職し35年になりました。現在は、医薬営業本部におり、営業戦略、情報戦略、関連システムの運営・管理、製品の広報、並びにコンプライアンスに関する指導を統括しています。製薬メーカーの仕事は開発した医薬品を通して患者さんとご家族に笑顔を届けることです。社会に不可欠、非常に重要な役割を担う中で全社的な影響力をもつ職に就き、責任が重いだけにやりがいの大きな仕事をさせて頂いています。

入社以来、MR（医療情報担当者）、リーダー、所長として得てきた様々な経験を生かして、後進の指導にあたることにも手応えを感じます。定年も見えてきましたが（笑）、現役の間はアグレッシブに、世界のより多くの人々がそれぞれの人生を豊かに過ごせるよう予防から治療・治療にわたる医療の多様なニーズに貢献したいと考えています。

黒澤：今原さんには本学の生涯学習事業・医療薬学セミナーの講師を何度も務めていただいています。この9月にも、広島市で医薬品業界についての最新の話をお話し頂きました。では、次は同じ薬学部出身の藤川さん、お願いします。

藤川：薬学部14期生です。鈴鹿医療科学大学薬学部で分子予防薬理学研究室を主宰しています。本学部では担任制をとっており、各学年3～5名の学生を受け持ち入学時から国家試験対策まで、一人ひとりの状況を把握し個人面談など細かな指導を行っています。これまで担当した学生の中には、成績不振者が面談を境に急激に学力を上げストレートで薬剤師国家試験に合格したケースもありました。このことは、教員と学生の人間関係の大切さを実感した出来

事で、16年間医学部に在籍し研究至上主義の環境にいた私が教員としての大きなやりがいを見つけるきっかけとなりました。以来、私の研究室にきた学生全員を国家試験合格に導き、いきいきと社会で活躍する姿を見るのが私の夢や目標より優先されることになりました。

研究活動では、(1)杜仲茶エキスおよびその主要成分・アスペルロシドによる抗肥満効果の作用機序解明、(2)杜仲茶エキスによる食欲抑制効果の作用機序解明、(3)食品による安静・睡眠誘導効果の作用機序解明、(4)エゾウコギエキスによる自律神経調節機構の解明、(5)既存の食品への特殊な加工による新規原料化の開発、以上大きく5つを進めています。

黒澤：本学は薬学部開設の4年後に歯学部を開設しました。今年は歯学部1期生の卒業から30周年です。歯学部2期生の三浦さん、13期生の中村さんは、現在どのようなお仕事をされていますか。

三浦：国立保健医療科学院に勤務しています。保健・医療・福祉に関係する自治体職員等への研修、並びに関連する調査研究を行う厚生労働省直轄の機関です。国が実施する厚生労働施策に関連する調査研究を行い、具体的な提言を行うこともしばしばです。歯科口腔保健法第12条に定められた基本的事項の策定と、国民健康づくり対策として実施されている健康日本21（第二次）の策定、これらでは厚生労働省内の専門委員会の委員を務め、基本的事項の策定に関する専門委員会では委員長代理を務めました。調査研究で得られた成果が国の施策に活用されることには大きなやりがいを感じます。また、歯科口腔保健法が制定されたこともあり、地域における歯科口腔保健施策に大きく関与できたこともうれしく思います。

今年から国際保健の仕事も加わりましたので、日本の高齢化対策や生活習慣病対策を、アジア諸国の健康施策に役立てる活動にも力点を置きたいと考えています。

中村：北海道大学の北キャンパスエリアにある先端生命科学研究院の自然免疫研究室で腸



【進行】黒澤 隆夫 副学長、薬学部教授

管免疫をテーマに研究を進めています。腸内抗菌ペプチド、とくにパネト細胞 α -ディフェンシンの働きに着目し、疾患との関連を探っています。 α -ディフェンシンが常在菌と病原菌の選択という働きを担うことを研究室として論文発表したのに続き、 α -ディフェンシンの測定方法を開発し、現在はマウスを使った実験が進行中です。 α -ディフェンシンの不足、過剰と、肥満や糖尿病といったメタボリックシンドローム系の疾患との関連性を明らかにすること、潰瘍性大腸炎、クローン病の炎症性腸疾患の原因解明と治療法開発をめざしています。 α -ディフェンシンがコントロールできるようになれば、サプリメントの開発、検査のマーカーとして使う可能性が考えられ、予防医学へも貢献できるという希望をもって進めています。

歯科医師らしい研究としては、培養した小腸の上皮細胞を使い、口腔常在菌と腸管自然免疫のクロストークの解明に取り組んでいます。口と腸はつながっていますから、イベントで子どもや市民に説明するときは、「簡単にいうと体はちくわみたいなものなんだよ」と説明します。（笑）

自分の立てた仮説通りの結果が出ることはごく稀ですが、そのめったにないポジティブな結果を目にしたときの「いま、このデータを知っているのは世界で自分だけだ」という感覚が忘れられなくて、先へ先へと進んでいます。

黒澤：本学は1993年には全国の大学で初めて看護教育と福祉教育を融合した看護福祉学部を開設しました。今日は看護学科1期生と臨床福祉学科の7期生にお越し頂いています。

河村：看護福祉学部看護学科1期生、東日本学園大学の校名で最後の入学生です。現在は大分大学の看護学科で精神看護学を担当して

います。助教と二人、概論から方法論まで講義、演習・実習、研究指導すべてを担当しています。教員になって、北海道医療大学の教員数の多さがよくわかりました。また、発達障がい児の施設での遊びの支援など、学生を巻き込んだボランティアの場をつくることにも取り組んでいます。

研究テーマはアニマルセラピーです。コミュニケーション上の障がいがある認知症高齢者や子どもを対象に、動物、(犬、馬)がいることで人と人のコミュニケーションがどう発展するかを研究しています。昨年から発達障がい児のケアに乗馬療法を取り入れました。所有する馬をセラピーだけでなく、福祉サービスに活用することも考えています。精神看護を専門としているせいか、看護と福祉の境界を意識せずに活動しています。今日いらしている大原さんの講演もお聞きしたことがあります。

大原：看護福祉学部臨床福祉学科7期生です。実はさのうはフォーラムがあって大分にいました。活動に重なる部分があるので、ぜひ次は河村さんの所にも寄らせて頂きます。

私は2012年より当別町の社会福祉法人「ゆうゆう」理事長を務めています。「ゆうゆう」の前身は北海道医療大学の卒業生4人で2005年に設立したNPO法人、さらにその前身は学生ボランティアの活動拠点でした。「ゆうゆう」の基本的事業は障がい者の社会参加の支援で、障がい者が働く場としてレストランやカフェ、農園などを経営しています。その他、デイサービスセンター、在宅介護支援センターなど、現在では当別町と江別市に10事業所を展開しています。北海道医療大学出身者を中心にした福祉専門職のほかパティシエやグラフィックデザイナーなど多彩な職員がおよそ60名、登録ボランティアは1,500人強の組織です。当別町では数少ない、北海道医療大学生の就職先としての位置づけも意識しました。

黒澤：卒業生が後輩の活躍の場をつくるというのは本学も望む、理想的なカタチです。大原さんは本学の客員教授でもあり、また学生の実習も受け入れて頂いていますね。

大原：はい、全学的授業を担当しています。臨

床福祉学科1年生には当ボランティアセンターでの2日間のボランティアを必修としています。ここで福祉の現場の面白さに目覚める学生もいます。学生の介護職員初任者研修(旧ホームヘルパー2級)を支援して、修了者にはグループ施設で介護のアルバイトをもらうシステムもあります。

「ゆうゆう」の活動理念は「地域を創る」です。既存の施設やサービスがなければ自分たちでつくります。障がい者も高齢者も自分の役割を見つけれられるまち、人生の最期まで暮らせるまち、学生も大人も、行政も民間企業も、まちの誰にもメリットのあるまち、ネガティブなイメージで語られることが多い“地方”で、新しいまちのデザインを提示していきたいと思っています。福祉は非常にクリエイティブな世界です。地域には課題が山積で、その多くが福祉に関わることです。やりがいだけの仕事といえます。ただ、私自身は仕事をしているという意識は希薄で、生き方をかたちにしている、表現しているという感覚です。

黒澤：本学では2002年に心理学部を開設しました。文系で教育されることが多かった心理に科学的にアプローチする新しいかたちの臨床心理学科からは1期生、3期生にお話を伺います。

本谷：心理学部臨床心理学科1期生です。福島県立医科大学で、学生、教職員の相談活動、附属病院の心身医療科でカウンセリングや検査など臨床活動を行っています。臨床と並行して行っている研究の中心は、慢性疼痛の患者さんに対する認知行動療法です。恩師、坂野教授は認知行動療法のわが国における第一人者ですから母校の誇りにかけて、有効な心理療法プログラムの開発を実現させるとともに、効果を脳科学の視点からも明らかにしたいと考えています。教育面では、学生の医療面接や災害時のこころのケアに関する演習形式の授業を担当しています。東日本大震災後は地域支援が増えたので、学外で民生委員やボランティアに対



する自殺予防、被災者・避難者支援での相談会や健康講話などの活動も行っています。

病院臨床で働きたいという希望が叶い、加えて福島医大病院は疼痛治療への先進的取り組みで全国的に知られる病院ですから、学部時代から「痛みに対する心理的支援」を専門テーマとする私には恵まれた環境下にいます。

千葉：臨床心理学科の3期生です。臨床心理学科の卒業生の進路は心理士などの専門職以外にも多彩で、私の職場はマスコミ、テレビ北海道です。現在は平日夕方の「道新ニュース」キャスター、土曜日の「サマー競馬」MC、「けいざいナビ北海道」のナレーションやレポート、その他映画のインタビューや野球のベンチリポートなどを担当しています。放送には画面に映るアナウンサーだけでなく、取材スタッフやカメラマン、音声スタッフ、タイムキーパーなどたくさんの方が関わり、それぞれの仕事に全力を注いでいます。私はそれを限られた時間の中で視聴者にしっかり伝えることが役割です。

私が「伝える」「つなぐ」ことが自分の仕事だと本当の意味で理解したのは生放送の現場、札幌ドームでの野球の試合終了後のヒーローインタビューでした。観客すべての視線が一点に集中した中でのインタビューで、広さと雰囲気は圧倒されマイクを握る手が震えました。でも、そのときふと観客席に目をやり、「選手は何を言ってくれるんだろう」という期待の表情で埋め尽くされているのを見て、「主役は選手、私は選手とファンをつなぐ役目」という当たり前のことに気づくことができました。すると、ふっと楽になり、リラックスしてインタビューができました。アナウンサー歴7年目になりますが、私なりに他者をつなぐコミュニケーションを考え、工夫する毎日です。

大学での経験がいま生きている

黒澤：本学での学びと現在のみなさんのお仕事とは切り離して考えられないと思いますが、本学での経験はどう生かされていると感じますか。在学中の思い出を交えてお聞かせください。

今原：私が入学した時は、当別キャンパスとは別に教養部の校舎が道東の音別町（現・釧路市）にありました。入学から1年半はタンチョウやエゾシカが身近にいる大自然の中での寮生活、最初の半年は入学したばかりの私たちと怖い1期生（笑）、次の半年は同期だけ、最後の半年は3期生との集団生活でした。2年次後期に当別キャンパスに移っても当時は交通の便も悪く、遊ぶ場所もなく、閉鎖的な環境だったといえます。しかし、その環境こそ人間関係構築力を育



今原 伸治さん

武田薬品工業（株）
医薬営業本部マーケティングマネジメント部長

●薬学部薬学科2期生 1979年卒業

薬剤師。北海道江別市出身。1979年4月武田薬品工業（株）入社。MR（医療情報担当者）として新潟支店を皮切りに神戸営業所チームリーダー、医薬営業本部マーケティングマネジメント部課長を経て、1997年大阪支店堺営業所所長。その後、広島営業所所長、医薬営業本部マーケティングマネジメント部グループマネジャーを務め、2007年札幌支店支店長、2011年大阪支店支店長。2013年4月より現職。本学薬学部同窓会主催の生涯学習事業・医療薬学セミナーの講師としてもおなじみ。

てくれました。いうまでもなく社会に出て大いに役立つ力です。あの時間を共に過ごした同期は生涯の友となり、いまでも毎年札幌で開く同期会には全国からたくさんの同期が時間をやりくりして集まります。

学びの面では、2年次の後期から卒業まで物理化学教室で取り組んだ研究がいちばんの思い出です。当時の山本教授、現教授の豊田先生の指導を受けながら、同期の鈴木君と実験を重ね英語論文にまとめました。学部生ながら英文雑誌に論文が掲載され、大きな達成感を得られました。この論文は、社会に出てからは度々、営業先のドクターと別刷りの交換などを通して距離を縮めるきっかけにもなりました。

そして何より、遊びたい盛りには厳し過ぎると感じるほどのご指導を受け（笑）、その結果取得できた薬剤師免許です。国家資格は身を助けます。薬剤師免許が営業での情報提供の説得力を増してくれる場面が多々ありました。

藤川：在学中に身についたことというと、まず実験テクニック、そして自学自習の習慣です。薬学部では各分野まんべんなく実習、実験がありました。その積み重ねからどこでも通用する実験テクニックを得られたことが、大学の外に出てわかりました。博士課程から長く医学部に在籍しましたが、医学部の大学院でも実験テクニックで劣っていると感じたことはありません。新しい実験に対しても簡単に対応できましたし、むしろ容易に感じるものもあつたくらいでした。また、北海道医療大学の先生方は厳しい反面、自主性に任せてくれる部分があり、自学自習に取り組む環境を作ってくれました。2年次からは講義前に「朝勉」と称してマクマリーの有機化学（洋書）、ハーバーの生化学（洋書）を繰り返し読み、夕方からは図書館が閉館するまで薬理学を勉強しました。この時に得た知識が大学院で大いに役立ちました。

黒澤：朝勉とは、勉強熱心な学生でしたね。学習意欲に火をつける雰囲気は教員が作り出せたとしたら大学としてうれしいことです。



藤川 隆彦さん

鈴鹿医療科学大学大学院薬学研究科 教授

●薬学部薬学科14期生
大学院薬学研究科修士課程1993年修了

1996年12月三重大大学院医学系研究科博士課程短縮修了。医学博士、薬剤師。大阪府出身。三重大医学部生化学講座助手、同講師、シンシナチ大学医学部に文部科学省在外研究員、国際科学振興財団兼任研究員を経て、2005年三重大大学院医学系研究科ゲノム再生医学講座講師、2008年同准教授と16年間医学部に在籍。2009年4月鈴鹿医療科学大学薬学部教授（薬学分子予防薬理学研究室）就任、2014年4月より現職。社外技術顧問を務めるなど積極的に民間企業とも連携。知的財産関連で3年連続学長表彰（三重大）。三重大医学部客員教授。

藤川：もちろん、勉強だけしていたわけではありません（笑）。バスケットボール部で学年や学部を超えた先輩・後輩と楽しい思い出もたくさん作りましたし、修士課程では札幌にある病院の薬局でアルバイトをさせて頂きました。振り返ると、時間の使い方を学んだと思います。「できる時間にできることを全てした」といえる大学時代でした。博士課程を短期修了できたのもそのおかげです。

自分が学生を受け持つ立場になり、当時の先生の大きさをあらためて感じます。忘れられないのは2年次の微生物の実習期間中に札幌で開催されたノーベル賞フォーラムに友人と2人、どうしても参加したいと森教授にお願いしたときのことです。私たちが後日、特別実習を受けられるよう取り計らってくださり、フォーラム参加を認めてくださいました。このときの講演で「これが研究なんだ」と全身で感じたことで現在の私があります。とても感謝しています。



中村 公則 さん

北海道大学大学院先端生命科学研究院 准教授

●歯学部歯学科13期生
大学院歯学研究科博士課程2000年修了

歯科博士、歯科医師。北海道美幌町出身。本学大学院博士課程修了後、札幌医科大学医学部分子医学研究部門助手、同講師を経て、2009年北海道大学大学院先端生命科学研究院特任助教、2011年同助教。2013年より現職。所属は生命機能科学研究部門細胞生物科学分野自然免疫研究室。

黒澤：いいお話です。さて、歯学部卒業生の三浦さんはどのような思い出がありますか。

三浦：大学時代といってまず思い出すのは最終のJRに乗り遅れないよう走ったことです（笑）。当時、歯学部の実習は遅い時間まで実施されることが多く、いつも当別キャンパスの坂を小さな駅に向かって全力で走り下っていました。目の前の課題をこなすのに精一杯の毎日でしたが、地道に積み重ねる努力と一つのことをやり遂げる強さが育まれた6年間でした。

学部卒業後は口腔衛生学講座の助手に採用され12年間勤務しましたが、大学の滞在時間はやはり長くハードでした。歯学部2期生ということで社会に出て活躍する先輩のロールモデルや基準となるデータが少なく、手当たり次第にチャレンジしていた印象がありますが、そんな当別での18年間の全てがいまの私の礎です。

黒澤：同じく歯学部卒業の中村さんはいかがですか。

中村：現在、先端生命科学研究院で腸内免疫を研究するという一見歯科とは関係のない環境にいますが、私は歯科医師免許がすべてのベースにあると思っています。歯学部で学んだ疾患の知識が役に立ったこともありますし、今原さんがおっしゃるように国家資格が説得力をアップしてくれる場面もあります。そして何より、国家試験という関門が私に学ぶ喜びを教えてくださいました。気づくのが遅すぎて後輩の手本になれませんが（笑）。国家試験に向けて周りの学生は膨大な量の情報をどんどん暗記していましたが、いざ始めてみると私は暗記が苦手で、できなかった。たぶんつまらなかったんです。それでどうやらできるかを考え、自分に合っているのは暗記ではなく理屈だと気づきました。すると全てが互いに結びついてストーリーとして見えてきました。知らないことがどれほど多いか、知らないことを知ることがどれほど面白いかが、その発見が大学院進学、研究の道へ進むきっかけとなりました。

黒澤：次に、看護福祉学部卒業の河村さんと大原さんに伺います。看護と福祉を融合した学部であると感じたことがあればそれもお聞かせください。

河村：私が看護と福祉の境界を意識することがないのは、やはり大学時代の環境にあると思います。臨床福祉学科と一緒に受ける授業もありましたし、休み時間のたびに看護福祉学部棟1階のラウンジに学生が集まって学科の違いを意識することなく楽しく過ごしていました。精神看護学実習で統合失調症の若い患者さんを担当し精神看護への興味が猛烈に湧くと、ますます福祉領域との親和性を感じるようになり、同時に、ケアの精神は共通でも私たち看護とは知っていることが違うことを発見しました。

こうして年数がたって、北海道医療大学の自由な雰囲気を、あらためてありがたく思います。先生方は学生のクリエイティブな発想、アイデアを尊重してくださいました。待っていてくれるからかで学生をのびのびと育ててくださいました。アニマルセラピーですとか興味あることに取り組めるのはそのおかげだと思います。また、在学中に使った教科書や先生方の著書が、いまは自分の授業の組み立てに役立っています。

大原：私も在学中から看護の先生方がこちらが思う以上に深く福祉の学生を理解してくれていると感じていました。大学院でも看護学専攻の方々と一緒に受ける共通科目があり、グループワーク、ディバートの機会がありました。看護師としての現場経験を経て大学院に入学された社会の先輩である方々と共に学び、議論できたことは大変刺激的、貴重な経験でした。

黒澤：本学では全学部の学生が関わるボランティア活動も伝統といえると思いますが、大原さんは当別町の学生ボランティアの拠点「ゆうゆう24」の立ち上げ時にも関わっていますね。

大原：はい。学部4年次に進級してからの1か月は開所準備で床張りなど大工仕事に費やしました。それがすべての始まりでした。当時教授だった横井寿之先生との真の意味での出会いはこのときです。私は1浪して北海道医療大学に入学しましたが、もし現役で大学進学していたら「ゆうゆう24」の立ち上げの場にはいなかった



河村 奈美子 さん

大分大学医学部看護学科 准教授

●看護福祉学部看護学科1期生 1997年卒業

2000年札幌医科大学大学院保健医療学研究科修士課程修了。2010年奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了。博士(学術)、看護師。北海道札幌市出身。1997年より札幌医科大学医学部附属病院に看護師として、大学院の2年間を挟み2002年3月まで勤務。その後、旭川医科大学医学部看護学科助手、札幌市立大学看護学部助手、同助教を経て、2012年4月より現職。

たと思うと、運命のようなものを感じます。教員であり、それ以上に現場人である横井先生の行動、発言を直に感じて「生き方=福祉」であると学び、「ゆうゆう24」の活動の中で福祉に対するマイナーなイメージが完全に払拭されました。人生観が変わりました。

大学院ではボランティアと、朝まで酒と議論の日々、24時間テレビに合わせたチャリティーイベントを役場や商工会をはじめ当別町の方々と連携して始めたのもこのころです。そして修士2年目の後半は論文執筆と「ゆうゆう24」のNPO法人化の申請準備を並行させました。学生がいきなり起業しようというものですからかなり大変でしたが、共に苦労した仲間はもちろん、先生、当別町の大人たちに陰ひなたにサポート頂きました。この経験で当別町へのこだわり、愛着が格段に増しました。どれもこれも、北海道医療大学だからできたことです。

黒澤：福祉領域をもつことは本学の強みの一つです。福祉の学生は他の医療系国家資格のような具体的目標が見えづらい点もありますが、大原さんは明確な一つの将来像を示してくれています。さて、心理科学部卒業の本谷さんは“心理科学部”らしさを感じたことはありますか。

本谷：心理科学部の名の通り、物事を科学的にとらえる視点、思考が養われました。情報をうのみにせず、偏見や憶測に踊らされず、目の前で起こっていることに対して丁寧にその現象の仕組みをひもといて、解決の糸口を探るという姿勢は、学部時代に徹底されました。「なぜ？」を大切に、その疑問に対して仮説を立て、情報を集め、正しいかどうかを科学的に検証する作業は、いまの臨床、研究どちらにも欠かせないものとなっています。学生時代に友人たちと悩み、議論した経験も生きていますね。また、学部、大学院と7年指導頂いた坂野雄二教授の「できるかできないかではなく、やるかやらないかだ」という言葉は、いまも私の活動の指針です。

黒澤：本谷さんは心理科学部1期生ですが、1期生は「あいの里キャンパスの校風や伝統は自分たちがつくる」という心意気があり団結が強かった印象があります。

本谷：そうですね。あいの里キャンパス内でサークルもできましたし、看護福祉学部と同様、心理科学部も学科の区別なく交流していました。とくに1期生は独特の使命感のようなものがあり仲間意識も強かったと思います。学部、大学院で苦楽を共にした仲間は、いま全国の各領域で活躍していますが、めざす方向性が同じ人もいます。彼らとコラボレートすれば社会に還元できるさらに大きなプロダクトを生み出せる可能性があると考え、いま、その方法を探っています。

黒澤：ぜひ実現させてください。期待しています。さて、マスコミで活躍中の千葉さんにとって大学はどのようなものでしたか。

千葉：大学の4年間は、大事な選択を迫られる人生の分かれ道のような時間だと思います。私自身、子どものころからアナウンサーを夢見ていましたが、3年次の病院での臨地実習で心理職の素晴らしさに触れ、かなり心が揺れました。迷いを吹っ切れたのは、現教授の冨家直明先生が当時スクールカウンセラーを務める高校での実習でした。生徒の前で話をする機会を頂き、「夢を諦めないで」という話をしたのですが、その時に「私はアナウンサーになる夢を実現させるから」と言ってしまったんです。人前で言葉にすると夢が現実味をもちました。声にして、言葉で発信することの力を実感しました。

楽しい時も迷った時も、大学時代いつもそばにいてくれた仲間は特別な存在です。とくに言語聴覚士や道外でスクールカウンセラーとして活躍中の卒業旅行のメンバーとは、いまも年に一度の海外旅行が恒例になっています。

学びがいまに通じていることといえば、やはりインタビューの場面でしょうか。様々な分野の方から初対面の限られた時間でお話を引き出すためには事前準備が不可欠で、まずそこで大学で学んだ情報収集の方法と客観的に物事を判断する力が生かされていると思います。実際のインタビューの際には、傾聴、受容や共感といったことが自然に頭にあり、知識そのものというよりコミュニケーションの作法みたいなものが身についたと感じます。「千葉さんだと話しやすいのよね」といわれるとカウンセリングを学んだおかげかなと思います。



本谷 亮さん

福島県立医科大学医療人育成・支援センター
／医学部神経精神医学講座 助教

●心理科学部臨床心理学科1期生
大学院心理科学研究科博士課程2011年修了

臨床心理士、博士(臨床心理学)。札幌市第1種非常勤職員(臨床心理技術者)、町立長沼病院精神神経科非常勤心理士、学校法人美芸学園こどもcom.専門学校非常勤講師、日本学術振興会特別研究員DC2を経て、2010年福島県立医科大学医療人育成・支援センター／医学部神経精神医学講座助手。2011年本学大学院博士課程を修了し、現職。2012年よりいわき明星大学人文学部心理学科非常勤講師も務める。

黒澤：本学の医療・福祉の担い手教育、また本学のこれからの期待すること、ご意見があれば、お話しください。

今原：私の在学中は薬学部に歯学部が加わったばかり、それが現在では医療系の総合大学となったことを誇りに、また頼もしく思います。その総合力を発揮し、社会が抱える様々な問題の解決を図ることを望みます。特に地元北海道の医療を支える中心的存在として強化されることに、大きく期待します。また、卒業生は多方面で活躍していますから、交流をさらに活発化すれば、社会で大きな力を発揮できるでしょう。日本一価値ある医療系総合大学へ発展していく過程を卒業生の一人として今後も楽しみにしています。

藤川：専門知識や技術の詰め込み教育ではなく、人の苦しみや痛みを自分のこととしてとら

え、優しさや愛情をもった医療や福祉を実現するという職業の根源にあるものを忘れず行動できる実践者を育てる教育に期待します。例えば、重要度を増す地域医療・福祉において、今後はセルフメディケーション、在宅に特化した薬剤師も必要となるでしょう。病院内だけでなく、地域で広く多職種連携ができる人材を育てる教育は単科大学には難しく、医療系総合大学の果たすべき使命と考えます。

また、私は北海道医療大学の夢つなぎ入試に感動しました。家庭の経済環境に関わらず意欲をもった学生に門戸を開く大学であり続けてほしいと思います。私も将来は経済的に困難な若者に学ぶチャンスを提供するシステムをつくりたいという夢をもっています。

三浦：国は今後10年間で医療と介護の提供体制の大幅な見直しを予定しています。超高齢社会を見据えた対策はすでに始まっていますが、そこで特に重要なのは多職種連携と地域性をふまえた課題分析能力です。北海道医療



三浦 宏子 さん

国立保健医療科学院 国際協力研究部長

●歯学部歯学科2期生 1985年卒業

歯科医師。神奈川県出身。1985年4月本学歯学部口腔衛生学講座助手、1995年同講師。1997年12月東京大学大学院医学系研究科国際保健計画学教室講師、2000年4月九州保健福祉大学保健科学部教授(言語聴覚療法学科)、2003年より同大学健康管理センター長を併任。2008年国立保健医療科学院口腔保健部長。2014年4月より現職。北海道医療大学客員教授。

大学の強みが生かせる時代です。今後さらに学部横断的な取り組みを推進し、社会が待っている医療や福祉の実践者の輩出を切望します。

また、わが国の医療・保健・福祉が抱える課題は高齢化と疾病構造変化を受けて、今後さらなる困難化が予想されます。地域の課題に根ざした対策を推進する上で、最終的に基盤となるのは人の力に尽きます。ニーズの変化に柔軟に対応する教育で、力のある医療人育成がさらに推進されることを願っています。

大原：藤川さん、三浦さんのおっしゃるように、高齢者や障がい者の在宅介護は国が推し進める施策です。人、設備、そして何よりフィールドという財産をもち、地域に密着した北海道医療大学が貢献できるポテンシャルはとても高いと思います。長く暮らしたまちで人生の幕を閉じるまで、どういう豊かさをつくれるか、総合力を生かしてのブランディングが可能だと思います。具体的には、大学附属の在宅医療センターのようなものができるといいと考えています。それは学びの場、就職の場、研究の場にもなり、さらに先へつながっていきます。

本谷：医療・福祉の現場で必要とされる多職種連携ができ、かつ自主的に考え実行する人材の育成に期待しています。現場では、明確な答えのない場面に遭遇します。その中でもつづれずに、柔軟な対応ができるよう、自ら考える学



大原 裕介 さん

社会福祉法人ゆうゆう 理事長

●看護福祉学部医療福祉学科7期生
大学院看護福祉学研究科修士課程2005年修了
※現臨床福祉学科

社会福祉士。北海道札幌市出身。2005年修士課程修了時に設立したNPO法人「ゆうゆう24」を、2012年社会福祉法人「ゆうゆう」とし、現職。厚生労働省社会保障審議会障害福祉部会委員、内閣府障害者政策委員会委員、NPO法人全国地域生活支援ネットワーク代表理事、一般社団法人FACE to FUKUSHI代表理事なども務める。北海道医療大学客員教授。

びの機会や学生同士で考えを共有できるような場が増えればと考えます。また、シミュレーターや模擬患者を用いた演習を早い段階から進めることも学習意欲やプロフェッショナリズム向上に役立ち、実践者の養成に効果的だと思います。

母校へ、後輩へ期待すること

黒澤：最後に本学の在学学生、また医療・福祉の道をめざす高校生にメッセージをお願いします。

今原：40年の歴史がある北海道医療大学の卒業生は、それぞれの領域で中心的地位に至る努力をしています。社会に出たときは卒業生のサポートを期待でき、とくに新人から中堅となる伸び盛りのときに確実なアドバンテージとなります。大学を基点とした強固な人脈が根付いていますので社会にでてからのことを心配しないで、有意義な学生生活をおくる事が出来ます。な

お、私は国際化がこれほど進むとは思っていませんでしたので、その反省から、一つだけ申します。社会にでる前には是非、語学を学んでください。とくに英語はある程度の会話力をつけ、場数を踏むこと、読み書きできるようになっていることをおすすめます。

藤川：医師には名医、やぶ医者という言葉がありますが薬剤師はじめ看護師や心理士など一緒に仕事をする他の職種にはまだありません。ぜひ、「名薬剤師」「名看護師」「名臨床心

理士」と呼ばれるような人材が母校の卒業生から出てほしいと願っています。私たち卒業生にインパクトを与えてくれる元気のよい後輩と学会で会えることを楽しみにしています。

三浦：学部時代の勉強は、社会で活躍するためのベースとなる梁づくりだと思います。梁は頑丈であるほど、その後可能性を広げることはもちろん、余裕にもつながります。梁を太くするには手間もひまもかかりますが、学部時代に手を抜くことがなければ、必ず次の展開が目の前に開けてきます。その中には幅広い知識や教養を身につけることも含まれます。大学はそのための最適の場所です。おろそかにすると、社会人になってから後悔することになります。まず、自分の10年後を見据えた梁づくりに励んでください。

中村：私自身、血液やガンなどこれまで様々な分野の研究に携わってきて、歯学部で学んだことの生かし方はいろいろあると実感しています。卒業後に医学・医療分野に貢献する方法は限定されません。もし、進むべき道をしばりきれずにいても、興味があるなら飛び込んでいいと思います。そこで頑張れば広がる世界があり、自分では予想しなかった方向にも道が開けます。医学・医療の懐は案外深いものです。

河村：北海道医療大学は自然も人も大きく、多様性のある豊かな環境です。そこに柔軟性のある面白い学び方があり、チャレンジする機

会もたくさんあります。「？」が出てきたらすぐに答えを知りたがらず、自由な発想と行動に向かってください。見守り、応援し、待っていてくれる先生が必ずいる温かい大学です。自分を枠にはめずのびやかに活躍する後輩と、どこかで出会えることを楽しみにしています。

大原：わざわざ志願して困難なことにチャレンジする、楽しみながらまじめにやる、それを地方と呼ばれる場所でやる、それがカッコよくなる時代になってきています。困難を舞台として、仲間と共に物語をつくる面白さを北海道医療大学で経験してみたいと思います。誰もやったことのないことに挑戦できる機会がたくさんあります。まちづくり、地方再生、もっと大きくこの国のためというテーマで夢をもつこともできます。資格取得も大学で学ぶ目的の一つですが、一度「自分のために」から「人のために」資格を取ると、視点を変えてみてください。するとこれまでとは違うものが見えてきます。私も先輩の一人として、福祉のクリエイティブな面、面白さをどんどん表現し、発信し続けていきます。

本谷：学部学科を超えて縦横斜め、学業でも部活でも広くつながりのできる大学です。卒業後、全国に張り巡らされたネットワークは刺激、励ましになり続けます。「北海道医療大学出身だから安心」といわれるよう、私たち卒業生も頑張っています。後進の活躍に大きく期待します。



千葉 真澄さん

(株)テレビ北海道 アナウンサー

●心理学部臨床心理学科3期生 2008年卒業

北海道札幌市出身。2008年NHK函館放送局入局、アナウンサーとしてのキャリアをスタートさせ、2011年NHK札幌放送局アナウンサー、2012年4月より現職。所属部署は報道制作局報道制作部アナウンス課。

千葉：心理学は実社会で応用がきく学問です。専門職ではなくても、さりげなく職場の雰囲気や明るくしたり、頼りにされる存在になることができると思います。カウンセラーがクライアントを選ぶのではなくクライアントに選ばれるように、アナウンサーの仕事も「私がこの番組に出たい」ではなく「千葉さんにやってもらいたい」といってもらえることが大切な仕事です。たぶんそれは、どの職業でも同じだと思います。心理学を学んで、仕事に限らず、自分と人、人と人のコミュニケーションをスムーズにすることで、明るく、みんなが優しい気持ちをもてる時間、空間をつくる仲間が増えると、とても素敵だと思います。

黒澤：本学の40年を様々な視点で振り返り、次のステップへの励ましも頂きました。卒業生のみなさんの母校への思い、期待に応える大学であり続けるよう歩みを進めていきます。ありがとうございました。

